やまぶし

J・A・C

日本山岳会山形支部
平成5年8月　　第6号
事務局長　真田匡三
事務局　山形市和合町2-3-7

利尻山登山報告特集

あいさつ

支部長　大橋克也

登ると云うこと。一緒に山を歩くと云うこと -- これは登山の楽しさの原点の一つである。ＪＡＣ支部の仲間たちが、心に秘めて何時かは登りたいと希っていた山・利尻山で、その思いを実現すると云う今回の行は、まことに山登りの原点を果たしたものとして、またとなくよい山行であった。しかも、留守部隊にとっても、羨ましい限りのリトルエキスペディションであった。

利尻島には、江戸末期ペリー来航の頃に、捕鯨船から小舟を出して単身、日本に憧れて漂りついたアメリカ青年の碑があると聞いている。平成の今にしても、北の果ての浄い頂。海から一気に聳え立っている険阻秀麗な山と言う憧れが私の胸にも在る。

今回の利尻登山には、支部の夢と希望とがこめられている。それがこの報告書の中に、光り、溢れているに違いない。

隊　員　名　簿

隊　員	氏　　名	年齢	住　　所	電話番号	移　　動
総隊長	金森　繁三郎	65	酒田市駅東2-11-8	0234-23-3859	空（新潟空港）
副隊長	加藤　達男	74	山形市南原町3-18-14	0236-22-4034	陸（車・山形）
登山隊長	阿部　勇作	64	酒田市栄5-24	0236-22-9578	陸（車・庄内）
隊員(渉外)	水沢　富一郎	68	山辺町北垣101	0236-64-7206	空（仙台空港）
隊員(渉外)	畠中　六左衛門	64	遊佐町大字吹浦字宿町	0234-77-2028	陸（車・庄内）
隊員(記録)	松田　孝一	60	藤島町字村東	0235-64-2862	陸（車・庄内）
隊員(記録)	会田　茂雄	53	山形市東原町2-4-25	0236-24-0447	空（仙台空港）
隊員(庶務)	三浦　繁司	43	山形市大字下椹沢521-	0236-45-2958	空（仙台空港）
隊員(記録)	折原　栄悦	57	山形市八日町2-2-14	0236-31-1352	空（仙台空港）
隊員(庶務)	長岡　伸恭	54	山形市下条町5-8-16	0236-84-8149	空（仙台空港）
マネージャー	梅津　博	61	山形市小白川町4-17-1	0236-32-5827	陸（車・山形）

注）移動欄は稚内までの移動手段をしめす。

空（新潟空港）　往復　酒田（鉄道利用）～新潟空港～千歳空港～稚内空港～稚内

空（仙台空港）　往復　山形（自家用車に分乗）～仙台空港～千歳空港～稚内空港～稚内

陸（車・庄内）　往路　庄内（自家用車に分乗）～八戸港～室蘭港～稚内

　　復路　稚内～室蘭港～青森港～庄内

陸（車・山形）　往路　山形（自家用車に分乗）～八戸港～室蘭港～稚内

　　復路　稚内～室蘭港～青森港～山形

利尻山登山

総　隊　長　　金　森　繁　三　郎

私たち山形支部の11名は、８月１日快晴の利尻山に登頂することができた。若い頃、登歩渓流会の川上氏（故人）が、厳冬期の利尻山頂と、ローソク岩に登った記録を読み、興奮した記憶がある。日本北限の高峰でもあり、一度は登りたいものと思いながら、つい何十年も経過してしまった。さいわい、今年度の支部夏山山行にとりあげられたので、待ち遠しい思いでこの日を迎えた。

出発は車班５名は７月30日、空路班６名は31日に、それぞれ山形と庄内を出発し、31日の午後風雨の稚内港で合流した。フェリー最終便で利尻島鴛泊に渡り、当日の宿大関旅館に入った。一行の阿部さんの姉さん（鴛泊居住）から、歓迎の清酒、ビールが差し入れられ、明日の天候快復を祈って乾杯した。翌８月１日は、いよいよ待ち望んだ登山日、午前６時濃い霧の中を車２台で出発し、鴛泊コースの北麓野営地（標高２５０米）で下車し歩き始めた。エゾマツ・トドマツの巨木に広葉樹の混じった、平坦な森林帯をぬけ、灌木状のダケカンバの尾根に出る。登るにつれ、強風で霧もとばされ、５合目から上は晴れ間が広がってきた。74才の会員の体調を気ずかいながら、全員ゆっくりペースで登る。

８合目長官山の小屋で、最後の休憩をとり、頂上をめざした。安山岩の岩礫がざらざら崩れる登り道で、ひどく歩くきづらい。要所要所に張られたロープにも助けられ、全員が北峯山頂神社に着いたときは、12時も半ばになっていた。昼食をすませ、記念写真を撮って、もとのコースを下る。９合目の岩礫地に株状に点在するリシリヒナゲシや、北側斜面草地に群生するボタンキンバイ等、この山にしかない花に目を奪われながら、目的を果たした喜びで下る足も軽くなった。午後６時宿に帰着し、お互いの労苦をねぎらいながら、祝杯をあげた。

第２日の８月２日は、礼文島に渡る日である。乗船が午後なので、午前中は観光をかねて、車で利尻島内を一周し、沓形コース、鬼脇コースから山頂を望み、最後に姫沼を見てから港に向かった。礼文島香深では、観光バスで島内を周遊したが、お目当てのレブンアツモリ草は、花期が過ぎてしまって見ることはできなかった。夕方今日の宿「山の上」についてから、松田さんは、折角ここまで来たのだから、島の最高峰礼文岳（４９０米）にも登りたい、と山にかける執念をにじませた。８月３日は最終日、全日程を終え帰る日である。松田さんは朝３時半に起き、レンタバイクで出発し、下車地から１時間かけて礼文岳頂上に立ち、約束どおり朝食時に帰ってきた。全員10時15分のフェリーで帰路につき、空路班は当日の夜、車班は１日おくれでそれぞれ帰着した。

今回のスケジュールが、時刻表のようにスムーズに運んだのも、マネージャー役を引き受けてくれた、梅津さんの綿密周到な登山計画書に負うところが多く、改めて感謝したい。

また、登山そのものについても、何回もこの山に登っている阿部さんが参加してくれたことで不安はなかったと言ってよい。私にとって利尻山は屋久島に次ぐ離島の高峰であり、どちらも退職後やっと果たした南北の山である。

行動記録

記録係　會田茂雄

7月30日（金）

8：30	山	形	加藤達男、梅津博　車で出発
	酒	田	畠中六左衛門、阿部勇作，松田孝一　車で出発
14：00	八	戸	八戸港着、途中、東北自動車道岩手山ＳＡで合流
17：30	八	戸	八戸港から室蘭へフェリーで出発

7月31日（土）

1：30	室	蘭	室蘭港着、すぐ豪雨の中２台の車で出発 （コース　室蘭～苫小牧～岩見沢～滝川～新十津川～碧水～留萌～天塩～稚咲内～抜海～ノシャップ岬～稚内～宗谷岬～稚内港）
13：00	稚	内	稚内港着、途中、サロベツ原野の長沼、パンケ沼、幌延ビジターセンターなどを見学、サロベツ原野の広大さに驚く。ノシャップ岬、宗谷岬でしばし、さいはての旅情にひたる。　（ここまで梅津記す）
5：30	山	形	水沢富一郎、折原栄悦、長岡伸恭、三浦繁司、會田茂雄　２台の車で一路仙台空港へ
6：45	仙	台	仙台空港着

8：15	仙　台	仙台空港発
	酒　田	金森繁三郎　列車で出発
	新　潟	新潟空港発
9：25	千　歳	山形からの便千歳空港着、金森繁三郎隊長と合流
11：25	千　歳	千歳空港発
12：15	稚　内	稚内空港着　タクシーで稚内港へ
13：00	稚　内	昼も過ぎており港前の大きな食堂に入ったが、中はがらがらなのに団体でないと駄目だとつれない返事だったので、隣の店へ行こうとしたところ車で遠征の人々と会う。 遅い昼食後、タクシーでノシャップ岬へと向かう、ノシャップ岬では雨が降り、半袖のためブルブルと寒さが身にしみる。ただの棒に野寒布岬とあるだけで余り感激がないと皆の声でした。その後水族館を見学、タクシーで稚内港にもどり全員が集結した。
16：10	稚　内	稚内港から利尻島へフェリーで出発
18：00	鴛　泊	鴛泊港着 旅館『大関』と阿部さんのお姉さんが出迎えにきており２台の車で今日の宿舎に向う。 夜は明日のミーテングと天気祭りをおこなう。

8月1日（日）

6：00	鴛　泊	出発、天候曇り、旅館を昨日と同じワンボックスカーとワゴン車で鴛泊コース３合目のキャンプ場まで送っていただく。
6：05	キャンプ場	標高２００m、管理棟もある立派なところであるが、朝早いためまだクローズ、車が入れないように柵がありコンクリートの幅の広い道が続き、キャンパーがちらほらみうけられる。
6：15	甘露泉	沢へ下ったところで岩の間より水が湧き出ている。あたりは一面ガスの中である。
6：35 45	小休止	整備された道を、少し進んだところにポン山分岐点があり、その先に乙女橋があり、そこを過ぎると両側にはトド松とエゾ松の大木が鬱蒼としげっ

		ている。トド松とエゾ松の違いの見分けで一番わかるのは木肌であり松の木のようにガサガサしているのがエゾ松とか。 周囲はあいかわらずガスっているが、風が吹く度に水滴が雨のように落ちてくる。阿部さん曰く若い時ここで１年暮らしたが、昔は風倒木を営林署より払い下げしてもらい島民全体で燃料として使用したが、今は使用する人もいないと言っていた。周囲は太い根曲竹だが種保存のため収穫期間は限られているとか。
7：25 45	小休止	トド松とエゾ松が周囲より消え、変わりにダケカンバ、ナナカマドに変わってくる。下草はマイズルソウが一面、それにノコギリソウ、ツバメオモト、ガスもはれてきて対岸の斜面では、笹が風が吹くたびに波のようにうねり美しい。一方沢には雪渓が見えてくる。
7：25	7合目	美しい木肌のダケカンバが一面、ブナの小さい木が見られた。 この島の動物は熊、蛇もいないと阿部さんは言っていた。
9：40 55	第２展望台	ガスの切れ間より富士岬の港が望まれ、波が高いのかところどころ白く光っている。
10：05 30	利尻岳小屋	小屋の前は多くの人々でごったかえしていた。 この時、今までガスに包まれていた利尻山も、カーテンを引いたようにスゥーと消えていく周囲では名カメラのシャッター音があちこちから聞こえてくる。山頂に残る雲、笠雲、中腹に残る雲、刻々変化していくなんと感動の一瞬かな、ここからの山頂は鋭くそそり立っている。 山頂直下の稜線は浸食され深くえぐられている。 一等三角点を見学したりあっというまに時がすぎる。
	長官山	道は、稜線どうりだが雨が降らないためか、前の人の埃がもうもうとあがるが、そこを過ぎると、道は深くえぐられ腰あたりまですっぽりと入ってしまう。 山頂より一旦鞍部に下る。この鞍部より沢どうしに下ると山小屋へ下る道があるが現在通行禁止となっている。ここよりいっきの登り。
11：00	小休止	雲に覆われていた礼文島がやっと見えてくる。 周囲にはエゾアズマギク、イワキギョウ、エゾトウチ草、イワベンケイ、ギョウジャニンニク、コバイケ草、花の終わったエゾハクサンイチゲ、ヨツバシオガマ等々
11：35 45	9合目	この辺より砂礫地帯となってくる。 リシリフスマ、エゾアヅマギク、エゾトウチ草、シャクナゲがあたり一面に咲き誇っている。

ローソク岩が異様に見えてくる。

12：20	小 休 止	足元からザクザクと崩れ落ちていく、そのため所々トラロープが張られておりそれを手掛かりとして……、クロアールのようなところを抜けると山頂が目の前に現れてくる。
12：40	利尻山頂	山頂は狭く神社があり登頂した登山客は、今日安全登山できたことに感謝しお参りしているようだ。神社、山頂の指導標の前は記念撮影のためごった返し、なかなか順番がまわってこない。 さっき見たローソク岩が雄大にそそり立ち、あたり一面には赤いエゾツツジが今を盛りに咲き誇っておりなんとも言えない風景 利尻空港の滑走路などは望めるが、鴛泊は依然ガスの中で、その西側はガスが流れてもすぐ消えるが鴛泊は消えず、遠くに礼文島が望まれる。そろそろ下り始める。
13：50 14：30	9 合 目	天候も落ち着き風もなく、広い場所で写真を撮ったりしゆっくりした一時を過ごす。下山も土埃がもうもうと
15：00 10	利尻岳小屋	
15：40 50	小 休 止	起伏もなく単調ないっきの下り、この辺までくるとむし暑くなってくる。
17：25	甘 露 泉	冷たい水をたらふく飲む。
17：35	キャンプ場	旅館に電話し迎えをお願いする。

8月2日（月）

7：30		阿部会員のお姉さんの家より自家用車1台お借りしたのと、レンタカー1台で島一周の観光に出かける。 始めに夕日ケ丘展望台、会津藩士の墓、沓形コースの展望台、利尻町立博物館、利尻島郷土資料館、姫沼よりと利尻山を360度の方面より眺められ感激ひとしおだった。
13：00	鴛 泊 港	礼文島へヘェリーで出発
14：10	香 深 港	今夜の宿、民宿『山の上』のおかみが迎えに出ており荷物を置いて、我々は礼文島一周4時間の観光バスへ 最北の地なのに何故かバスガイドの名前が『南さおり』ですという自己

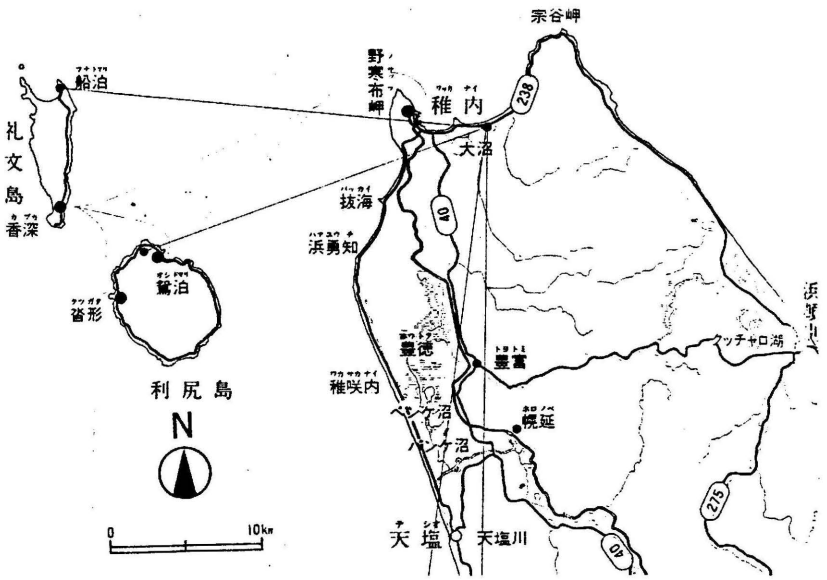
紹介でバスは出発：桃岩展望台はバスを降りて山頂へ、桃岩の後ろ側へ、地蔵岩では、枯れ木の割れ目にコインがいっぱい嵌めてあり我々もそれに従う、そしてメノウ石拾い、日食観測記念碑、澄海岬へバスガイドが駆け足で登るのでそれに従うが、バスガイドはすぐダウン、お客さんのみどうぞと、そこより眺める海はあくまでも青く澄んでいる。この島は海岸より全島高山植物に包まれている。日本最北の地スコトン岬へ、そしてその北へある無人島トド島を望むことができた。その後港へ戻ると民宿のおばさんが迎えにきてくれていた。ライトバン１台のため４名しか乗れないのに後ろにも乗れると、荷物を入れるところへどうぞと３名乗る。折り返し。

8月3日（火）

8：00	民宿山の上	民宿より乗船まで時間があるが、おみやげ購入のため早めに出る。
8：40	香深港	
10：30	稚内港	定刻より遅れて到着、ここで飛行機班、自動車班に別れる。山行の間皆様お世話様でした。次回の再会約束し。 飛行機班は山形・酒田へそれぞれ夕刻帰着した。
23：30	室蘭	自動車班は陸路（岩見沢から高速利用）室蘭へ、室蘭港から青森へ

8月4日（水）

6：30	青森	青森港着　山形・庄内へそれぞれ夕刻帰着した。



最北端の山利尻富士に登山して

参加

登山隊長　阿部勇作

最北端の山利尻富士（1,721 米）に登ることを支部年間計画で決定し参加者11名の会員は７月31日15時まで稚内港東日本海フェリー発着所前に集合、16時出航利尻島鴛泊港行に乗船17時45分無事到着する。深夜から強い風雨になやまされましたが、明日の好天を願いつつ登山前夜の日和上げを打ち上げお互い旅の労をねぎらう。

翌８月１日早朝から雲は低くたれ込め小雨も降っていた。旅館の主人は風向きがよいから天気はよくなりそうだと言ってくれたので私たちは鴛泊コースに向かって予定時刻に旅館を後にする。車の終点から約く0．5粁米地点、日本最北端の名水甘露泉付近から雨は止んだようであった。一行はエゾマツ・トドマツの原生林の中をしばらく登ると広葉樹林帯となり梢の間から下界も望まれるようになった。ダケカンバのトンネルにさしかかる頃には西側から風におされたガスは次第に本島の方におしやられ夏の青空へと変わって行く。第２展望台につく頃には長官山（1,221米）から西側はすばらしい視界を展開してくれた。

利尻富士で唯一の山小舎のある長官山にたどりつくと先客が大勢小舎の前の広場にたむろしていた。頂上付近のガスも時々はれ頂上は見えかくれしていた。私たちもここで休憩ガスのはれ間の美しい利尻富士をカメラにおさめたあと頂上を目指す。長官山から頂上までは高山植物が多く色とりどりの花が咲いていました。鞍部を通過して沓形コースの出会い付近から頂上に至る登山道は崩壊がはげしくガレキに足をとられながら登らなければならない。そのため道路幅が広くなり、登山者がすくなかった時代の山を知るものにとっては、このまま放置しておけば、いずれ鬼脇コースのように頂上までの登山は困難になってくるのではないだろうかと思うと淋しさがこみあげてくると同時に、自分も利尻山の自然の破壊者の一人のような気がして自責の念にかられこの先どうなるのだろうかと考えさせられた。

頂上に到着したのは12時40分ついに最北端の利尻富士の頂上に全員立つことができました。はるか彼方には本島の西海岸が一直線に北にのび抜海付近の雲の中に吸い込まれれてゆく、鬼脇・沓形の町並みは眼下に眺望されましたが、私たちが登ってきた鴛泊は終日ガスの下となり美しい港町風景を眺望することはできませんでした。

快晴に恵まれ幸運を喜びながら利尻神社奥の院前で記念写真におさまり13時40分下山の途につく、下山路は足どりも軽く暑さのため汗ばむのを覚えました。

早朝の礼文岳

松　田　孝　一

一昨日の利尻山以来の好天は、今朝も続いている。しかし同行者はいない。はるばる北の国の山登りに来たのに、モッタイナイ！

まだ４時前だ、静かに出る。この民宿の主人は、腕の良い魚師という。昆布採りの前に車で香深港にあるレンタバイク屋迄送ってくれた。

スクーターを、内路（ないろ）登山口駐車場に置き、すぐ急坂のジクザクを登る。途中、水平線に太陽が顔を出した。間もなく傾斜は緩く平坦になる。背丈の笹原は、巾広く刈り払われて快適だ。ダケカンバの林になり、カラ類に混じりウグイスやコマドリの声もきこえる。

少しトドマツ林に代わるが、再びダケカンバ林となり、そこを抜けると低い笹原で、やや急坂になる。

歩き出して40分、刈り払いのない起登臼（きとうす）コースが左から合う。ここから先は刈り払われていない背丈の笹の朝露で、すっかり濡れてしまった。

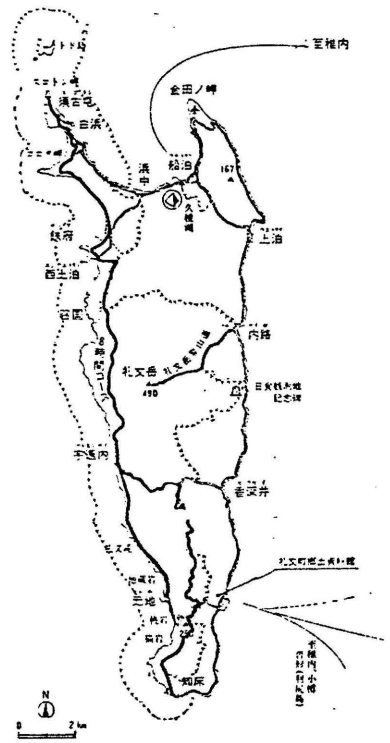
３１４mピーク、ここからは、頂上や利尻山も見える。

ハイマツ帯になり高山気分だ。登山道の両側だけが並木状にダケカンバが続く。５分ほど歩き、山稜の右をわずかトラバースし、400mのハイマツの小ピークに達する。頂上が目前に迫る。

低い笹を分けてコルから上り返し、左を見れば、海霧の上に、利尻山がすっくと立っていた。神秘的というか幻想的というべきか。

ハイマツ帯の急坂を上がれば、そこは一等三角点の礼文岳頂上だ。二つのケルンと標識のみで、360°の大展望をさえぎるものはない。南に利尻山から桃岩方面、北には、これも昨日行った北端のスコトン岬、その先トド島まで，490mの標高とは到底思えない眺望の良さを、時の経過も忘れ、じっと一人占めにしていた。

＜タイム＞　登山口（４０）起登臼（きとうす）分岐
（５５）頂上（３５）分岐（３０）登山口



会計収支明細書

平成５年８月31日現在

収入の部

会費	@¥30,000*11 人	¥330,000
その他	真田匡三氏より拝領	¥5,000
合　計		**¥335,000**

支出の部

宿泊関係

鴛泊　旅館大関	@¥7,000×11人×2泊	¥154,000
	消費税	¥4,620
	おにぎり @¥200×22	¥4,400
	ビール @¥500×12本	¥6,000
	計	**¥169,020**
香深　民宿山の上	@¥6,000×11人	¥66,000
	ビール @¥500×10本	¥5,000
	酒 @¥250×10本	¥2,500
	計	**¥73,500**

利尻礼文学術調査関係

利尻島	レンタカー（燃料代込）	¥21,969
	乗用車借り上げ謝礼	¥5,000
	ガソリン代	¥2,420
	利尻町立博物館見学　@¥200×11人	¥2,200
	利尻島郷土資料館見学　@¥200×11人	¥2,200
礼文島	観光バス　@¥3,200×11人	¥35,200
	計	**¥68,989**
利尻礼文連絡フェリー（鴛泊　香深）　@¥720×11人		**¥7,920**

雑　費

行動連絡（現地から支部長へ電話連絡（総隊長）２回）		¥200
お土産（菊池・真田両氏　写真集と蛸干し@¥1,760 ）		¥3,520
準備費用	利尻礼文電話連絡　２回	¥200
	計画書郵送代	¥1,570
	宿泊予約金郵送代	¥442
	登山宿泊資料照会(@62×4枚)	¥248
報告会費用（積立）		**¥9,391**
	計	**¥15,571**

合　計 **¥335,000**

菊地俊彦氏から銘酒１本をお預かりしております。

利尻 礼文 余話

マネージャー　梅津博

支部行事に利尻山登山がとりあげられたのが、５月の総会で、支部員に周知できたのがその後ということで、実施までほんのわずかの期間しかない中で、これだけの人数の参加を得てほぼ満足にできたことは隊員皆さんの日頃からの登山活動の成果と思っております。

５月の時点で新潟からフェリーという提案をしたのでしたが、実施の時期からいってまず無理かなという思いはありました。今にして思えば、キャンセルするにしても２台分くらいは予約しておくべきでした。

参加者が予想していたのと違ってだいぶ多くなってこれは困ったことになったと実は少々慌て気味でしたが、半分ほどが飛行機利用ということでヤレヤレと安心したのは事実です。それでも宿泊、フェリーの乗り継ぎには、出発まで心配しました。

新潟からのフェリーは全然とれないことが分かりました。今までの経験からキャンセル待ちでも乗れるとは思ったのですが、支部の公式行事でもあり予約できるところをようやく探してもらい八戸から室蘭に渡ることにしました。帰りも室蘭から青森がようやくとれたということです。

この時期にこれだけの人数で北海道（とは限らず）に渡るとすれば、遅くても２か月前までは参加者を確定しておくべきだと思います。飛行機の確保にしても同様のことがいえると思います。宿泊についても気安く泊まれるところを第一に探したのですが、奥尻島の地震が幸い（？）して利尻島でも宿泊キャンセルがあったりしてこれはうまく行きました。最悪の場合は分宿も考えておりました。

計画実行者として一番困るのは、参加するかしないか分からない人が出てくることで今回も最後まで悩まされたことは事実です。

登山コースについては、参加者の年齢構成から、無理のないペース配分を考え全員が一緒に登頂することを大前提としました。当日朝の天候が思わしくなく、前日の雨で岩が濡れていると大変だという旅館の人の話しなどを検討して、鴛泊コースの往復に変更していただきました。これも結果論ですが、当初の計画どおりのコース（沓形から登り鴛泊に下る）でも初期の目的は達成できたように思われます。情報の不足はあったにしても、もっとよく研究すべきだったと反省しております。

天候にも恵まれて全員が登頂できたとはいえ、今，世間でいわれている高齢者或いは高齢者を含む登山を行う場合に考えなければならないことがたくさんあることを痛感しました。

報告書については、始め一枚程度のものを考えていたのでしたが、貴重な原稿をたくさん頂きこのようなものになりました。報告書の中の地名は執筆者に断りなくなるべく漢字を使用しました。ただ、ノシャップ岬、スコトン岬、トド島、ローソク岩等は通常使われているものにしました。文章は執筆者の原稿をほぼ忠実にワープロしたつもりです。お忙しい中を原稿を送っていただいたことを感謝申し上げます。